

魯迅との交流が生んだ日中友好の架け橋

「私の目から見て、また私の心において、彼は偉大な人格である。その姓名を知る人がよし少ないにせよ。」

魯迅「藤野先生」（竹内好訳）より

中国の文豪・魯迅が終生の恩師として仰いだ福井出身の医師・藤野厳九郎。国を越え、師弟として心を通わせた2人の惜別から100年の歳月が過ぎた。

魯迅との出会い

1874（明治7）年、現在のあわら市下番で、江戸のはじめから続く医師の家に生まれた厳九郎は、1904（明治37）年に仙台医学専門学校（現在の東北大学医学部）の解剖学教授に就任。同年、中国からの留学生と

して入学した周樹人、後の魯迅と出会うことになる。当時、日清戦争に勝利した日本には、中国を軽んずる風潮が漂っていた。

厳九郎は非常に厳格な教師として、不勉強な学生からは敬遠されていた。ある日、魯迅は厳九郎から研究室に呼ばれ、解剖学の講義ノートの提出を求められる。そして2、3日後、返されたノートには朱書きで脱落部分を書き加えてあるばかりか、文法的な誤りまで、すべて訂正してあった。厳九郎の丁寧な指導に魯迅は驚きと感激を覚える。

この添削をきっかけに、二人の師弟愛は徐々に深まっていた。

医師として生きる

しかし、母国・中国を憂いた魯迅は、一年半後に文学の道へ転向を決意。退学することを告げる彼に、厳九郎は自分の写真を手渡した。裏側には「惜別」の文字が書かれていた。

魯迅が仙台を去った翌年には、厳九郎も郷里の福井へ戻り、1918（大正7）年、三国町で医院を開業する。「医は仁術」を信念とし、貧しい人からは診療代を取らなかったため、自分が借金で苦

しむこともあった。それでも患者のためには高価な薬も惜しみなく使ったという。

師弟愛は日中友好の礎に

一方、帰国した魯迅は文学革命の指導者として活躍。1926（大正15）年には、厳九郎との思い出をつづった「藤野先生」を発表した。厳九郎の消息を知りたいと願った魯迅は、日本での『魯迅選集』出版にあたり、この作品を入れることを熱望。その甲斐あって、選集を読んだ厳九郎は魯迅が偉大な作家となつていることを知り、大いに喜んだという。

しかし、厳九郎は魯迅の恩師であつたことを鼻にかけることも

なく、終戦直前の1945（昭和20）年、往診中に倒れ亡くなった。享年71歳。地域に尽くした医師としての最期だった。

厳九郎と魯迅。2人が再会することはなかった。しかし、国籍や立場の違いを超えてお互いを尊敬しあつた2人の人間関係は、いつの時代も人々に支持され、「藤野先生」は中国の教科書にも採用されている。そしてお互いの故郷である、あわら市と浙江省紹興市が姉妹都市として友好を深めるなど、今も日中間の架け橋となり続けているのだ。



魯迅との別れの際に手渡した写真（複製）。裏には「惜別 藤野 謹呈周君」の文字



魯迅の講義ノート（複製）。朱書きが厳九郎の添削した部分。ノートは全部で6冊に渡った（藤野厳九郎記念館所蔵）



厳九郎が三国で住んでいた当時の家を移築した『藤野厳九郎記念館』の内部。診療に用いた薬棚や調度類が復元されている（あわら市舟津）



足羽山にある「惜別の碑」。魯迅と厳九郎の交流を記念して、1964（昭和39）年に建てられた

関連情報

◇再読「藤野先生」特別展

10/14（土）～29（日）県国際交流会館

11/12（日）～26（日）若狭図書学習センター

◇特別講演「魯迅と藤野厳九郎ーそして日中関係を考える」

講師：寺島実郎氏（日本総合研究所会長）

10/22（日）13:30～ 県国際交流会館